なまず絵

9月1日前後の防災週間には、テレビで災害関係の番組を放送することが少なくないが、先日面白い場面をみた。東海地震の「地震防災対策強化地域」にある静岡県清水市の自主防災組織のひとつで、「防災音頭」を踊っているのである。お祭りの最中にも地震を忘れないようにという配慮だそうだが、その音頭に、「地震くるかとなまずに聞けば油断したとき油断したときくるという」という文句があったのは、印象的だった。

なまずを地震の原因とみなす信仰は、古くからあった。鎌倉時代の建久年間の暦などには、地震 虫とも地震蛇ともみえるものが載っているが、江戸時代の元禄・宝永年間には「地震ーなまず」説が発生し、次第に浸透していったといわれている(今村明恒『鯰のざれごと』)。これは、なまずが地震に敏感であるという経験的事実に由来しているが、地震となまずの関係をもっとも象徴的に示しているのは、安政江戸地震の後におびただしく出た「なまず絵」であろう。

安政 2 (1855) 年午後 8 時ごろ、江戸を襲った直下型地震は、7 千人とも1 万人ともいわれる人的被害を生じた大災害であった。そして、この地震の直後から、さまざまな刊行物が出現している。たとえば、かわら版や錦絵などだけでも実に300以上におよんだということである。なまず絵もそうしたもののひとつであり、安政地震といえばなまず絵、なまず絵といえば安政地震を連想するほど、関係が深い。

こうしたなまず絵のなかには、「ちょぼくれ」 や「おおつぶれぶし」といった滑稽な戯文調のも のが少なくないが、なまず絵の研究家であるオランダ人のC. アウエハントによれば、なまず絵のモチーフのひとつは、災難よけのまじないである。江戸では地震のときに「万歳楽万歳楽」と唱え、関西では「世直し世直し」と唱えたという(今村明恒前掲書)が、こうした表題のなまず絵も多い。もうひとつのモチーフは、地震が生み出したさまざまな社会現象を風刺したり揶揄したりするものである。たとえば、あこぎに金儲けをしていた「長者」が地震で財産を失ったり、逆に日ごろ金に事欠いていた大工や左官などの職人が復旧景気で羽振りがよくなったことを、おもしろおかしく描いている。

もちろん、これらのモチーフが混在しているものもある。図1がその例で、右側では大黒の足の下のなまずが「もううごかぬからはなしてくだせへ、ヤレ万ざいらく万ざいらく」と、二度と地震を起こさないことを誓っている。左上には「大黒のつち動かして帯中に宝の山を積みぞめでたき」とあり、町人が小判を拾い集めている。図2の「志んよし原」大なまずゆらひ」は反対に、地震の被害を受けた遊女やたいこもちが、なまずを懲らしめ恨みをはらしているシーンである。

なまず絵の多くは許可を受けない不法出版で、 辻売りや店頭のつるし売りで捌かれたとのことで あり(小野秀雄『かわら版物語』)、ほとんどの読 者は職人や下層町民だったと予想される。かれら はなまず絵によって、地震が生み出した皮肉な 「世直し」現象を楽しみ、りゅう飲を下げたに違 いないのである。 (東京大学助教授 広井脩)



